

南蛮文化の花開いた天草諸島で

中村いすず

平成の「天草更紗」創作に挑む



天草に伝わる更紗布

西欧人がヨーロッパや中近東、インドなどの更紗を、長崎出島より伝えたこととされています。肥前・肥後においては、長崎更紗・鍋島更紗（半兵衛更紗）、そして天草更紗が作られました。天草更紗の起源は諸説あり、文政年間（1818〜29年）、徳川11代将軍家斉の頃、城之木場村（現五和町）金子安吉と、富岡町（現天草郡）の森伊衛門が、天草に移り住んでいたオランダ人に教わった説と、京の職人から更紗染の技法を習得した説があります。しかし、すでにそれより30年程前に御領（現五和町）の中村嘉藤助が寛政初期、長崎で更紗の技術を習得し、更紗を制作していたといわれています。嘉藤助は、後に「天草更紗」で県指定無形文化財保持者になる中村初義の曾祖父です。

天草の更紗染布と技法

九州熊本県の西の外れ天草諸島は、大きく上島・下島に分かれ、私は天草諸島の中心部（天草市）に住んでいます。安土桃山時代、ポルトガルの宣教師が来島し、コレジオ（大学）を創建しました。天正遣欧少年使節団が持ち帰った活版印刷機で「伊曾保物語」「平家物語」等「天草本」が日本で初めて多数印刷されました。また、天草四郎率いるキリシタン信徒を主とする農民と幕府軍の戦い、「天草島原の乱」で有名な地でもあります。このように異国情緒漂う南蛮文化の花が開いた隠れキリシタンの島で、私は天草更紗の染めを行っています。

天草更紗の先人たち

正確な記録は残されていませんが、桃山時代に、



天草の更紗も江戸時代、舶来更紗を真似て技を身に付けた職人の手で制作され、庶民に愛される布になっていったと考えられます。資料館、旧家、蒐集家によって集められた更紗布を見ると、その技法は片面に型紙を使って刷毛で摺り込む技法、ヘラで色糊置きしていく捺染技法の両方が見られます。色糊を使った捺染は明治以降の技法ですが、天草更紗の技法について、鍋島更紗（半兵衛更紗）のように、一子相伝の秘伝書のようなものは伝わっていません。

天草更紗復興に生きた中村初義

中村初義は、明治18年5月19日、本渡町に生まれ

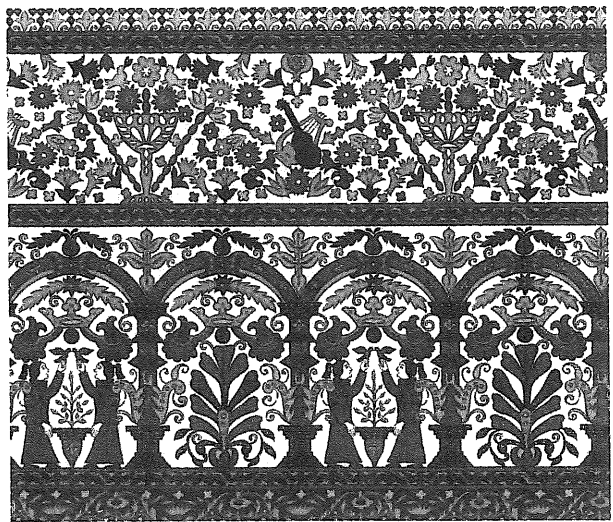
更紗に「天草更紗」と命名しました。しかし時代の

ました。中村家初代は嘉藤助で、型紙染め布を当時の代官に献上していた程盛大に紺屋を営んでいました。2代目は紺屋をやめ、3代目初義は17歳の頃、親戚の紺屋規矩屋（母方の実家）、大黒屋（有馬家）で奉公していました。他には、唐津屋が更紗染を行っていました。大黒屋は金子安吉の養子先で、明治35年頃まで更紗染を行っていました。昨年、私は有馬氏（南町、金子安吉の子孫）から安吉制作の更紗を見せて頂きました。有馬氏は母から「安吉は初義に更紗染を教え、型紙も差し上げた」とよく聞いていたそうです。初義は紺屋に5、6年勤めた後、更紗を本格的に染めるために、九州各地を回り型紙を集めました。その後京都へ渡り、25歳まで京染屋で技術習得に励み、翌年の暮れ、本渡（現天草市）に帰り、中村染工場を開業しました。これまで所持していた型紙に加えて、遠く京都や伊勢からも更紗型を取り寄せ、天草更紗復興に専念しました。大正11年の「天草共進会」に初めて更紗を出品し、昭和8年の熊本工芸展で完全に復興を成し遂げました。熊本県は昭和39年3月10日にその功績をたたえて無形文化財に指定しました。この時から初義は自らの



更紗を染める筆者（色糊による型紙捺染）

が消えかけ、手仕事と共にほとんどの和更紗が消え



平成の天草更紗



天草更紗で作ったドレス
(文化服装学院連鎖校、ヒロ・デザイン専門学校)



天草更紗の小物

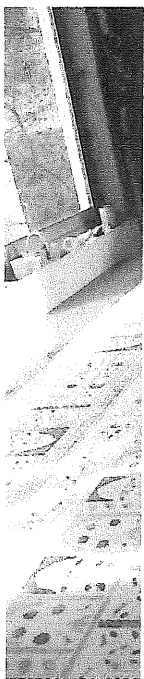
天草更紗との出会い

天草更紗と私の出会いは20年以上前です。私は当時の人々が、見たこともない動物や花鳥等の柄、鮮やかな色彩、初めて出会った布の美しさにどれだけ驚き、心奪われたかをこの更紗模様を見て想像しました。そして、和の持つ渋味の深さも相まって、見ていると穏やかに解き放たれていくような不思議な感覚と魅力を感じました。その後私が染織をしていたこともあり、市長や文化協会の方から天草更紗復元のお話をいただき、また、郷土史家等が収集された資料をご贈下さるといふご縁をいただきました。わずかばかりの文献、資料を手がかりの作業は大変でしたが、誰かが手掛けなければ、このままでは本当に途絶えてしまう。そんな思いが日増しに強くなりました。そして、初義のご親族にご挨拶に伺いました。その際快く、「あなたのご親族に製作していただく」と激励をいただき、改めて、天草更紗に取り組む決心がつけられたのです。

平成の天草更紗を染める

前に少し触れましたが、これぞ天草更紗といえる独自性のある残存更紗裂が全く見当たらず、更紗模様であっても技法が伴わなければ、更紗として見做すのは無理があるといわれる人もいます。

しかし明治初期に化学染料や印刷技術などが輸入されるようになり、それまでの積み重ねられた技の伝承の仕組みは消滅しつつありました。多くの職人



が消えかけ、手仕事と共にほとんどの和更紗が消えていく時代に、天草で苦勞して染め続けてきた先人が生きていました。伝統的工芸品などでは100年(明治末)の伝統があることが基準になっていたと聞いています。現在、国の重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定された方たちでも、多くの人が近代以降の技法で染めておられます。「当時の技法ではない、独自性がない」ではなく、私は「多様な形で伝えてきたことが天草更紗の独自性だ」と語りたいたいです。そして「先人たちの名譽と尊厳を護りたい」と思っています。平成の今、天草で更紗を染めることは先人の手技を取り戻し、今に合った伝承の新しいシステムを制作することだと思っています。時代に合ったものに変わっていく柔軟性、品格を残して伝えていくことが大切だと思います。これらの伝統工芸で新たな街おこしにもなり、作品を生み出すことは後世にも残ります。

私も出会いから25年の歳月をたどって、天草に身を置き、天草の風土が織りなす更紗を受け継ぎました。誰か私の更紗と出会って、やってみようという方が現れてくれることを願っています。

さて、私は復興するにあたって、天草四郎や聖杯、西欧人によって天草地方にもたらされた南蛮文化の古楽器や無花果、ギヤマンなどで、天草の歴史を物語るデザイン「平成の天草更紗」など新しい柄にも挑戦しています(意匠登録済)。けれども、数ある柄の中で、いつも染め上げた時に「素晴らしい!」と唸らせる柄があります。桃山時代、日本に着くまでに渡って来たであろう、かの地を彷彿とさせる柄です。伝統を大切にしながら、挑戦も続けて生きたいと思っています。

中村いすず
染色家、工房「野のや」主宰